

大学キャンパスが周辺地域に及ぼす影響—東京を事例として—

Study on Influence that university campus exerts on surrounding area: Tokyo as a case

学籍番号	66827
氏 名	梅岡 恒治 (Umeoka, Koji)
指導教員	大野 秀敏 教授
キーワード	大学キャンパス / 大規模団地 / 閉領域 / 文化的価値

第 1 章 序

1.1 研究の背景

昨今、大学に関して、大学全入時代におけるあり方、工場等制限法の撤廃に伴うキャンパスの移転の問題等が議論されている。そのような中で、都市空間を構成する一つの要素として、大学キャンパスが都市空間の中で持つ価値を明らかにすることは重要であると考えられる。

1.2 研究の目的

そこで本研究は、東京を事例に (1) 現状における大学キャンパスの周辺地域に対する特性を把握した上で、(2) 周辺地域において大学キャンパスがどのように評価・イメージされているかを明らかにする。そして、(3) 大学キャンパスが周辺地域に対して持つ価値を多面的に解明することで、都市における大学キャンパスの存在意義を明確にすることを目的とする。

第 2 章 大学キャンパスの現状

本章では、立地・交通、形態・規模、開放性の側面から調査することで、大学キャンパスの周辺地域に対する特性を明らかにする。

2.1 都心と郊外

設置年毎に示した立地変遷図 1 と、立地と鉄道を重ね合わせた図 2 を見てみると、工場等制限法の影響を受けながら、鉄道の拡大と共に大学キャンパスの立地が都心→郊外→都心と変遷をしている。そして、都心では鉄道に近接した形で大学キャンパスが立地しているのに対し、郊外では鉄道と無関係な立地をしており、大学キャンパスが市街地との関連性を持たずに立地していることが読み取れる。

図 1: 大学キャンパスの分布変遷

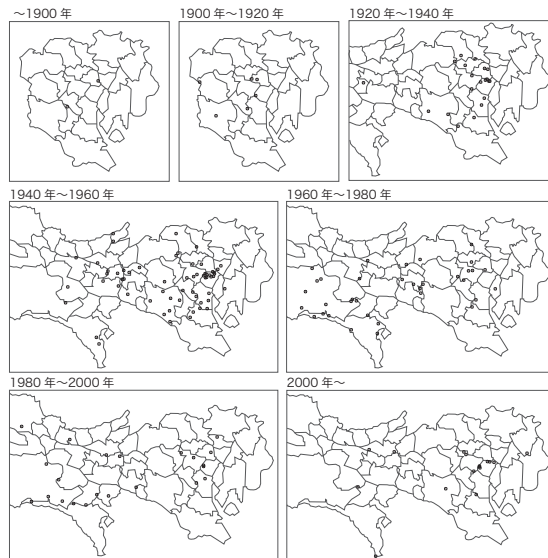


図 2: キャンパス立地と鉄道



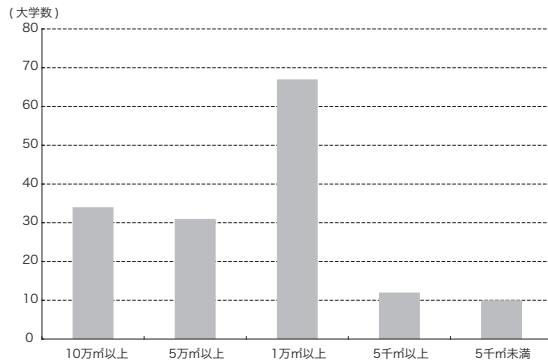
2.2 大規模団地

各大学の配置を見ると、大学キャンパスの形態は 4 つに分類でき (図 3)、団地型が多くを占めている。また、敷地面積について見れば分かるように (図 4)、東京における大学キャンパスの平均規模は約 7 万 m² あり、大学キャンパスが、都市空間の中で大きなまとまりのある団地として存在していることが分かる。

図 3: キャンパス形態分類

大規模型 大規模な敷地面積の中に複数の建物が集約されているタイプ。	街区型 街区単位に集約された建物敷地が複数集合してキャンパスを形成しているタイプ。	ビル型 敷地一建物によってキャンパスを形成しているタイプ。	テナント型 建物の一部をキャンパスとして利用しているタイプ。

図 4: 大学キャンパスの敷地面積



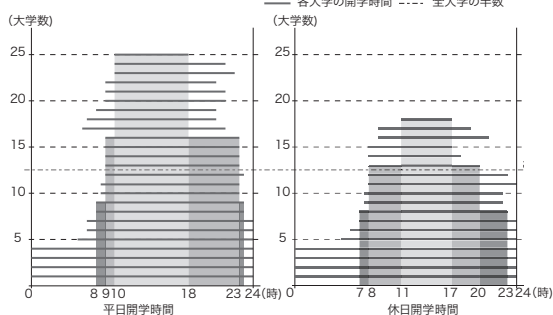
2.3 閉鎖域

大学キャンパスの開放性について、塀の有無、入構可否、入構可能時間について、38 大学にヒアリングを行い、形態毎に分類すると表 1、図 5 のような結果になった。

表 1: キャンパスの開放性

	塀有り	塀無し	入場可	入場不可	総計
団地型	25(93%)	2(7%)	22(81%)	5(19%)	27校
街区型	2(50%)	2(50%)	4(100%)	0(0%)	4校
ビル型	0(0%)	6(100%)	3(50%)	3(50%)	6校
テナント型	0(0%)	2(100%)	0(0%)	2(100%)	2校

図 5: キャンパスの開学時間



これを見ると、ほとんどの団地型の大学キャンパスが塀を持っており、閉鎖的な領域として大学キャンパスが存在していることが分かる。入構が可能な大学キャンパスは多く、大学キャンパスの開門時間に関しても、半数以上の大学キャンパスで 8 時から 22 時までであることがわかる。しかし、休日には閉鎖している大学は多くなり、夏・冬の長期休暇中も閉まる大学が多い。さらに、図書館などの施設外部利用も限られている。

第 3 章 大学キャンパスの評価

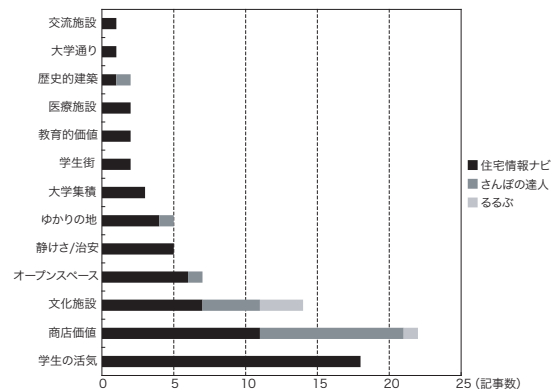
本章ではタウンガイド系メディアを対象に大学キャンパスが周辺地域からどのような評価を得ているのかを明らかにする。

3.1 イメージ

まず、タウンガイドから大学 / 学生と関連する言葉を拾いだすことで、大学キャンパスが周辺住民にどのようにイメージされているかを明らかにした。対象としたメディアは以下の 3 つである。

- ・「住宅情報ナビ / 気になる街の暮らしレポート」
- ・『散歩の達人 東京都心散歩』『散歩の達人 東京下町散歩』
- ・『るるぶ MAP 東京』

図 6: キャンパスのイメージ

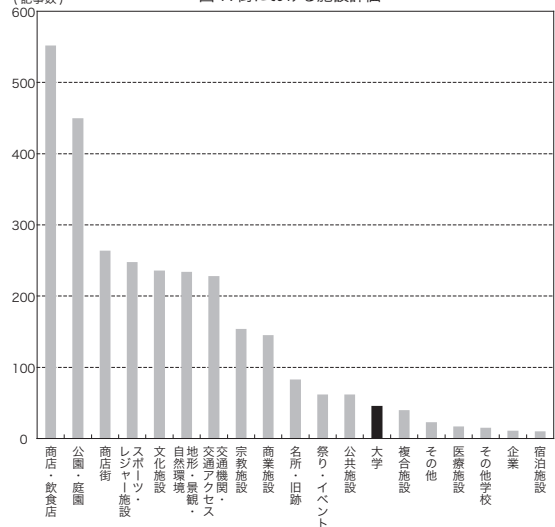


これを見ると、大学キャンパス周辺の学生街は高く評価されているが、キャンパス自体の評価は低い。これはキャンパスの閉鎖性に由来すると考えられる。

3.2 大学キャンパスの評価

次に、大学キャンパスが他施設と比較して、周辺地域からどの程度評価されているかを明らかにした。

図 7: 街における施設評価



先の表を見ると分かるように、評価においてもその閉鎖性故に大学キャンパスはそれほど高い評価を得ていないことが分かる。しかし、イメージで見たように、大学キャンパスは多様な価値を持っており、それら文化的価値を客観的に明らかにすることは重要であると考えられる。

第4章 大学キャンパスの価値

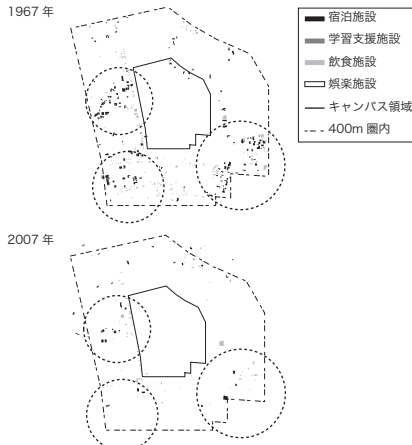
本章では、2、3章を踏まえた上で、大学キャンパスの都市における存在意義としての文化的価値を明らかにする。

4.1 波及的価値

4.1.1 商業立地

大学キャンパスの周辺には学生街と呼ばれる独特の商業立地が起こる。その構造については、既往文献(*1)によって明らかにされている。既往文献によれば、学生街は溜まり場的な長時間利用の場所から成り立っており、具体的な施設で言えば余暇、飲食、宿泊、学習支援施設であった。そして、その成立は周辺地区の成熟度と、大学キャンパスの開放性という要因に大きく影響を受けている。しかし、時代の変化と共に学生の滞在時間は減少し、周辺住民にも街の活気が無くなったという意識が生まれ、学生街の衰退現象が起こっているのが現状である、ということが明らかにされている。そこで、本節では、その構造を確認するために、学生街発達期である1960,70年代と現状の商業立地を比較することで、大学キャンパスの学生街性を明らかにした。これを見ると、学生のキャンパス近接居住と商業の衰退の関連性が見て取れる(図7)。

図7: 東京大学本郷周辺の商業立地の変化
1967年



4.2 空間的価値

4.2.1 大樹 / 並木 / 庭園

大学キャンパスは多くの大樹 / 並木 / 庭園といったものをもっている。本節では、それらのうち、第三者によって評価を得ているケースを明らかにし、大学キャンパスの持つ自然名所性を明らかにした。

図8: 大学キャンパスの自然名所



成蹊大学 / 榊並木
「残したい日本の
音風景100選」

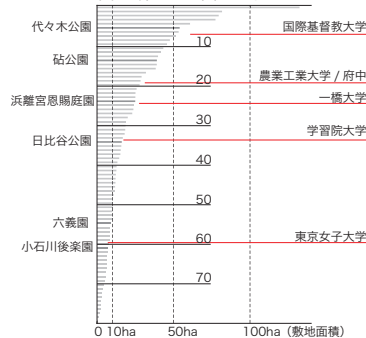
早稲田 / ヒマラヤ杉
「みどりの新宿30選」

国際基督教大学 / 桜並木
「歴史の浪漫街道 桜並木」

4.2.2 緑地 / 空地

大学キャンパスは大規模団地であるため、豊富な緑地 / 空地を所有している。本節では、都立の公園・庭園と比較することによって、そのオープンスペース性を明らかにした。

図9: 都立の公園と大学キャンパス



4.2.3 歴史的領域 / 歴史的建築

大学キャンパスは周辺地域の変化にも関わらず、戦災を免れているなどのことから、歴史的領域 / 歴史的建築を残してきた。本節では、周辺地域の変化と大学キャンパスの領域 / 建築の変化を、江戸期から現代に至るまで見ることで、大学キャンパスの持つ持続性を明らかにした。

図10: 大学キャンパスの建物年代



東京大学 本郷キャンパス (1877)

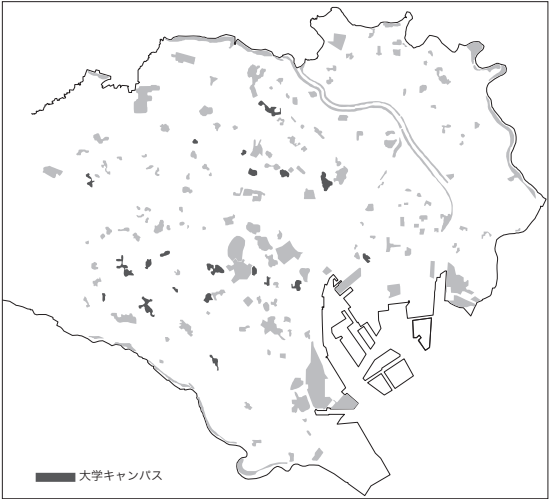
■ 1940年代建築 ■ 1970年代建築 ■ 2000年代建築

4.3 社会的価値

4.3.1 避難所

都市において災害から免れるための避難所は住民にとって必要不可欠なものであるが、大学キャンパスは20校が広域避難所として認定されており、他施設と比較しても大学キャンパスは大きな割合を占めていることが分かった。

図 11: 東京の広域避難所



4.3.2 生涯教育

大学は近年生涯教育の場としての役割が期待されている。本節では、大学の行っている公開講座、文化施設、コミュニケーションセンター/エクステンションセンター、地域連携の4つの活動を明らかにし、大学キャンパスの地域交流性を示した。

4.3.3 異文化性

大学キャンパスは、日本においては数少ない西洋様式を持つ建物を多く保有している。その中でも特徴的に異文化性を表象するものとして、時計塔が挙げられる。本節では、大学キャンパスの異文化性を表象する建築を挙げ、アイコン性を持つことを明らかにした。

図 12: 大学キャンパスの表象する異文化性事例



第5章 総括

大学キャンパスは、東京において都心から郊外へ、郊外から都心へと変遷しながら拡大をしてきた。そして、大学キャンパスは大規模団地として存在しながら、閉領域としても存在していることがわかった。

それ故、大学キャンパスの周辺地域における評価はそれほど高くなく、大学キャンパスに関するイメージも、大学キャンパスそれ自体の価値よりは学生街的な価値に重きが置かれているのが現状である。しかし、大学キャンパスのイメージは多様に存在しており、学生街的な価値を含むそれら全ては大学キャンパスの文化的価値として捉えなおすことができる。

そして、その文化的価値として、波及的価値としての商業立地、空間的価値としての大樹/並木/庭園、緑地/空地、歴史的領域/建築、社会的価値としての避難所、生涯教育、異文化性というものがあることを明らかにした。それらをまとめると図 13 のようになる。

図 13: 大学キャンパスの持つ文化的価値

価値	機能	性格
波及的価値	商業立地	学生街性
空間的価値	並木 / 大樹 / 庭園	自然名所性
	緑地 / 空地	オープンスペース性
	歴史的領域 / 建築	持続性
社会的価値	避難所	防災性
	生涯教育	地域交流性
	異文化性	アイコン性

これらの文化的価値を全ての大学が持つわけではないが、多様な価値を明らかにする中で繰り返し現れた大学キャンパスは、複数の価値を一つのキャンパスに内包している。

これはつまり、都市空間において、他施設と異なり、大学キャンパスが文化的価値を総合的に集約して持つ存在であるということである。

*1 李彰浩、後藤春彦、三宅諭『大学周辺地域の衰退とまちづくり活動の展開—早稲田大学「西早稲田キャンパス」と周辺地 域を事例として—』日本建築学会計画系論文集、第 542 号、pp.175-182,2001.4

・徐王幾、土肥博至『都市と大学キャンパスの関係性に関する考察—日韓両国の事例研究を通して—』日本建築学会計画系論文報告集、第 452 号、pp.125 ~ 132,1993.10

・河西奈緒『学生の空間利用実態と意識から見た学生街研究—団塊世代を対象として—』東京工業大学、学士論文、2006